

## 自己主導型学習を促す入学前教育プログラムの開発と実践

高良要多

桃山学院大学

### 1. はじめに

#### (1) 高大接続と入学前教育

多くの私立大学において入学試験の多様化や早期化が進む中、高大接続および入学前教育の意義がますます問われる状況となっている。文部科学省中央教育審議会は答申の中で高大接続について、その目標は、高等学校教育と大学教育において、十分な知識・技能、十分な思考力・判断力・表現力、及び主体性を持って多様な人々と協働する力の育成を最大限に行う場と方法の実現であると述べており、大学入試のみの改革ではなく、高校生、大学生が自分で目標を持って新しいことを成し遂げていく力の向上や修得の場も含まれると述べている(中央教育審議会, 2014)。また、大学に入学してからの初年次教育は非常に重要であるが、高等教育に対する不適応を起こし、退学等を検討する時期が1年次の4月から6月という時期が多いことから、初年次教育では学生の学びの姿勢を転換させようとしても間に合わず、高大接続期、すなわち入試をはさむ入学前の時期の教育が重要であるとの指摘もある(進研アド, 2018)。このように、入学前教育を含む高大接続改革は、教育の質保証および質的転換に係る非常に重要な取組みである。

#### (2) 桃山学院大学における入学前教育

桃山学院大学(以下「本学」という)において、新入生全員を対象に入学前教育プログラムを実施したのは2021年度に遡る。2021年度以前は、各学部が中心となり、年内入試合格者や一部の入試制度による合格者を対象に、作文の添削、基礎数学、基礎英語といったリメディアル教育を中心としたプログラムが展開されていた。また、その実施体制についても、数日の通学プログラムを実施した学部もあったが、基本的には教材をオンラインや郵便等含む通信教育で展開する外部の業者に委託しての実施であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、新入生対象のガイダンスや各種オリエンテーション等がこれまでのように対面で実施できない中、新入生が必要な情報を入手し、履修登録等の諸手続きを期間内に終え、オンラインで開講される授業を初回から間違いなく受講できるようにするために、情報を発信する手段と新たな入学前教育のあり方を検討する必要があった。幸いにも本学はLMS(Learning Management System)をコロナ禍以前に導入していたため、入学手続きを行った新入生に学籍番号を順次付与することで、入学予定者全員を対象にオンラインで入学前教育プログラムを実施することが可能であり、上述した課題を解決するための情報と学習コンテンツを提供することができた。

しかし、オンラインによる学びの機会の提供は、新たなチャレンジをもたらすものでもあった。LMSで展開するオンデマンドのオンライン学習では、学習者にLMSの使い方を含むICT基礎スキルが求められ、また、学習を計画的に進め、学習に対するモチベー

ションを維持し続けることも求められる。2023 年度に実施した入学前教育プログラムは、これら課題への対応を含め、高大接続や初年次教育に資する内容として教材を開発し、展開したものである。本稿では、プログラムの学習目標やコンテンツ、開発手法、実施体制等について紹介し、当該プログラムによる成果と今後の課題について報告する。

## 2. 入学前教育プログラムの開発

### (1) プログラムの学習目標と開発の方向性

入学前教育を実施する目的は各大学により異なる。一般的には、早期に入試が終わった入学予定者に対して、入学までの空白期間を埋めるものとして、教科学習を中心とする入学前教育が行われている。しかし、この入学前の時期に教科の課題を課す意図は入学予定者には伝わりにくく、主体的に取り組めていないケースが多いとの指摘がある。また、続けて、入学後の学習意欲の低下が中途退学を招いているという現状において、「学習」に対する意欲や「学問」に対する意欲を向上させるための入学前教育を設計することが求められていると述べている(及川・石田, 2019)。本学も指摘の通りの課題を抱えていたが、コロナ禍において試みた大学独自の入学前教育プログラムに発展性を見出すことができたため、全新入生を対象とするオンデマンドプログラムを継続することとした。そして、2023 年 1 月から実施するプログラムでは、新たに「大学生になる」という学習テーマを掲げ、「1. 大学で必要となる学習スキルを習得する」、「2. 大学生生活で必要となる情報を入手する」、「3. 自立・自律することを理解する」、「4. 論理的思考や批判的思考について理解する」の四つの学習目標を設定し、学習コンテンツの開発を進めた。

「大学生になる」という学習テーマを設定するにあたり、大学生とは何なのか、大学はどのような場で、大学の目的は何なのかという議論を避けることはできない。本稿ではこの議論は割愛するが、中等教育や高等教育での「学習のスタイル」を定義することで、大学における学習の意義、また、入学前教育の目的と立ち位置を明確にしたい。

### (2) 自己調整学習と自己主導型学習

中等教育では、探究学習の導入が積極的に進められているとは言え、基本的には教師主導型の学習が展開されている。学校指導要領に基づいたカリキュラムと時間割が設定されている中、一般的には生徒が科目を自由に選択し、学習する内容を自ら決定する機会は少ない。しかし、大学入学後、生徒は「学生」となり、一転して主体性が求められ、カリキュラムに沿う形で履修する科目を自ら選択することとなる。また、講義、演習、実習など、様々な授業形態において学習目標を達成するために自立的な学習、すなわち「自己調整学習」が求められる(自己調整学習研究会, 2012)。更に大学卒業後は、変化の激しい社会において、学習ニーズの判断、学習の到達目標の設定、学習のための人的・物理的リソースの特定、適切な学習方法の選択・実施、学習成果の評価を個人の主導権をもって行う「自己主導型学習」が求められる(Knowles, 2005)。この学習スタイルの転換の概要を図 1 に示す。

本学の入学前教育プログラムは、図 1 が示すように、教師主導型学習から自己調整学習へと移行する準備と訓練の場として位置づけ、必要な情報や学習スキルを学ぶ機会を提供できるよう設計している。また、大学での学習の準備に留まらず、この入学前教育プログラムが生涯学習の入り口であること、自己主導型学習が近い将来に求められることを意識できるよう教材を開発している。

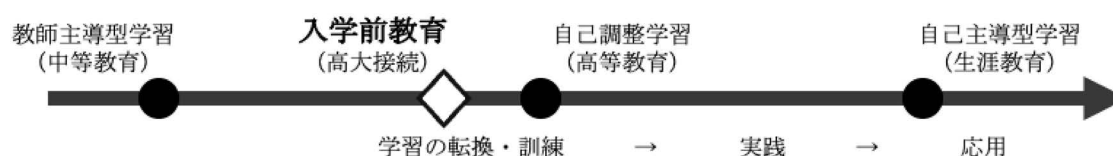


図1 学習スタイルの移行と入学前教育

表1 ARCS モデルによるアプローチ

| ARCS の<br>4 要因 | Attention<br>(注意)                                                                                                                    | Relevance<br>(関連性)                                                                                                        | Confidence<br>(自信)                                                                                                                               | Satisfaction<br>(満足感)                                                                                                                      |
|----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| アプローチ          | 知覚的喚起<br>探究心の喚起<br>変化性                                                                                                               | 親しみやすさ<br>目的志向性<br>動機との一致                                                                                                 | 学習要求<br>成功の機会<br>自己コントロール                                                                                                                        | 自然な結果<br>肯定的な結果<br>公平さ                                                                                                                     |
| 学習者の<br>マインド   | おもしろそう                                                                                                                               | やりがいがありそう                                                                                                                 | やればできそう                                                                                                                                          | やってよかった                                                                                                                                    |
| 活用事例           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学での学びの特徴の紹介</li> <li>・大学の魅力等の紹介</li> <li>・バライティのある章設定</li> <li>・テキスト教材と動画教材のミックス</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・テキスト内容をイメージできる画像挿入</li> <li>・章ごとの学習目標設定</li> <li>・大学生活や将来にどう繋がるかの具体的説明</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・章ごとの課題、テスト</li> <li>・何度でも挑戦できるテスト</li> <li>・実用的な学習スキルの練習</li> <li>・簡単すぎず、難しすぎずのバランスを意識した難易度設定</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・成績評価基準の明確化</li> <li>・合格者への単位認定</li> <li>・肯定的なフィードバックや励ましのメッセージ</li> <li>・教材内容に基づいたテスト問題</li> </ul> |

### (3) インストラクショナルデザインの ARCS モデル

インストラクショナルデザイン(以下「ID」という。)は、教育を中心とした学びの「効果・効率・魅力」の向上を目指した手法の総称である(鈴木, 2016)。本学の入学前教育プログラムは、LMS を利用しオンデマンドで展開されるため、受講者による自己管理、学習を継続するモチベーションの維持・向上といったスキルを求めることとなる。そのためには、教材を適切に開発する他、受講者の「学習意欲」を高める仕組みを導入する必要がある。そこで筆者は、ID の ARCS モデルを参考にし、教材の開発とプログラムの設計を行った。ARCS モデルとは、ジョン・M・ケラーによって提唱された学主意欲に関する ID のモデルであり、Attention (注意)、Relevance (関連性)、Confidence (自信)、Satisfaction (満足感)の四つの側面から学習意欲にアプローチするものである(鈴木, 2016)。ARCS モデルは当該プログラムの教材開発および実施体制の要であり、プログラム全体、また、各レッスンユニットにおいて「学習意欲」を向上させるための工夫と仕掛けを盛り込むことを意識している。ARCS モデルの概要と当該プログラムにおける ARCS モデルの活用事例の一部をまとめたものを表1に示す。

### (4) 初年次教育を中心とした入学前教育

本学の入学前教育プログラムの特色は、教科学習を中心としたリメディアル教育ではなく、自立・自律した学生となるための態度や学習スキルの向上といった初年次教育に資する内容に特化したことである。仮に基礎英語、基礎数学、国語・作文といった教科学習を

中心としたリメディアル教育を入学前教育として位置付けた場合、二つの問題や懸念が生じる。一つ目は、受講者のモチベーションに関する懸念である。「大学生になる」というテーマを掲げながら、学習する内容が中等教育での教科の復習や学び直しであれば、受講者は大学で学ぶことをイメージできず、学習へのモチベーションの維持が難しくなることが予想される。二つ目は、単位認定プログラムとしての実施が難しくなることである。リメディアル教育は「補習教育」とも呼ばれ、大学の正規課程の教育内容ではなく、高校以下の教育内容に関する補習を意味するものである(杉谷, 2015)。よって、リメディアル教育が中心となる入学前教育では、大学において単位を認定することは望ましくないと考える。この二つの問題は、ARCSモデルの観点からも指摘することができる。リメディアル教育では、受講者の「注意」を惹きつけ、大学生活との「関連性」を見出し、入学前教育を通して「自信」を付け、学んだことについて「満足感」を得ることは難しいであろう。入学前教育を学習者中心のものとし、より意義のあるものとするためには、リメディアル教育ではなく、初年次教育をスキームとしたプログラム設計が望ましいと判断できる。

### 3. 入学前プログラムの実施

#### (1) プログラム実施準備

プログラム実施に向けての準備は、大きく四つのプロセスがある。第1は、教材の開発プロセスである。LMSを利用しオンデマンドでプログラムを展開するため、テキスト教材や動画教材を作成する必要があった。第2は、当該プログラムを単位認定プログラムとして実施するための学内審議プロセスである。当該プログラムは全入学予定者を受講対象とするため、全学共通教育を管理する「共通教育機構会議」、全学の学務事項について審議する「教務委員会」、また、各学部の「教授会」において、プログラムの実施および単位認定案について審議し、了承を得る必要があった。第3は、LMSの設定プロセスである。作成した教材をLMS上にアップロードし、また、ユニットごとのテストを設定したり、課題提出の条件等を設定したりする必要があった。また、LMSには受講者の学籍番号を登録する必要がある。本学の場合、入試形態により入学手続きの時期が異なるため、学籍番号を生成・付与する時期を、1月初旬、2月初旬、3月中旬、3月下旬の4回に分ける必要があった。また、入学手続きを終えた学生がすぐにLMSにログインし学習に取り組むことができるよう、関連所管と連携しながら学籍番号の付与およびLMSの設定を行った。第4は、広報活動のプロセスである。入学前教育プログラムの案内については、入学予定者が必ず閲覧する「新入生サイト」に大々的に掲載する他、2月下旬までにLMSにアクセスがなかった受講者には、プログラムの案内ハガキを郵送するなど、広くプログラムが伝わるよう広報活動を行った。プログラム実施に向けて、筆者が所属していた共通教育機構事務課だけではなく、情報センター、学生支援課、入試課、教務課といった所管との連携が円滑であったこと、また、大学執行部や各学部からの理解があったことも、準備が順調に捗った要因である。なお、プログラムについては、全学の入学予定者を対象に実施すること、また、単位認定については、カリキュラム上認定が難しいビジネスデザイン学部を除くすべての学部においてされることが承認されている。

#### (2) プログラムコンテンツの概要

当該プログラムのコンテンツは、表2に示す通り、13のレッスンユニットと参加任意



表2 入学前教育プログラムのレッスンユニットと学習コンテンツ

| レッスンユニット               | 学習コンテンツ (抜粋)                                               | コマ数 |
|------------------------|------------------------------------------------------------|-----|
| 1. 入学前教育プログラムの案内       | ・ LMS へのログイン・使い方／入学前ロードマップ                                 | 1   |
| 2. はじめに                | ・ 入学前自己評価／目標設定                                             | 1   |
| 3. 大学での学び              | ・ 大学で使われる用語／読解力と論点                                         | 1   |
| 4. 大学生になるために           | ・ 自立・自立した学生<br>・ 成人年齢引下げと消費者教育                             | 1   |
| 5. 桃山学院大学と建学の精神        | ・ 桃山学院大学の建学の精神<br>・ 桃山学院大学とダイバーシティ                         | 1   |
| 6. 大学生に求められる ICT リテラシー | ・ ICT リテラシーと情報倫理 PC 基本操作<br>・ PC 基本操作／ Word ／メールマナーと Gmail | 2   |
| 7. 時間管理と Google カレンダー  | ・ 時間管理と Google カレンダー                                       | 1   |
| 8. 論理的思考と批判的思考         | ・ 論理的思考／批判的思考                                              | 1   |
| 9. ノート・メモの取り方          | ・ ノートの取り方 (模擬授業)                                           | 1   |
| 10. レジューメの活用           | ・ レジューメの活用方法 (模擬授業)                                        | 1   |
| 11. 学習スキルの紹介           | ・ 13 の学習スキル紹介<br>・ 学習習慣を身に付けるための戦略                         | 1   |
| 12. 桃山の英語教育            | ・ 英語カリキュラムの紹介／プレイスメントテスト                                   | 1   |
| 13. まとめ                | ・ リフレクション／最終テスト<br>・ GPS-Academic ／今後の予定／履修登録案内            | 2   |
| 対面プログラム (参加任意)         | ・ 批判的思考ワークショップ・ディスカッション<br>・ 学生企画イベント／何でも相談コーナー            | —   |

の対面プログラムからなる。各レッスンでは、1コマまたは2コマの授業時間に相当する教材を準備し、また、課題提出やテストを課している。総学習時間数は2単位分に相当する時間を見積もっている。成績評価方法については、「プログラムへの参画」を30%、「課題提出」を20%、「小テスト」を40%、「最終テスト」を10%とした。「プログラムへの参画」は、LMSで確認する学習進捗率、複数アンケートへの回答有無、英語プレイスメントテストの受験有無からなる。「課題提出」は、三つの課題の採点結果からなる。「小テスト」は、計8回の小テストのスコアを合算したものとなる。また、「最終テスト」は、最後のレッスンユニットで実施する最終テストのスコアからなる。これらを最終的に素点化した上で、100点中60点以上を獲得できた者を単位認定の対象としている。

学習期間については、3月中旬から下旬にかけて入学手続きをする学生もいることから、6月末日までプログラムコンテンツにアクセスできるようLMSを設定し、すべての受講者に対して一定期間の学習機会を担保するようにしている。

### (3) 教・職・学協働による運営体制

上述した通り、多くの所管や学部の協力のもとプログラムを実施したが、主体的に運営に関わった組織は、筆者が所属していた「共通教育機構事務課」および本学の「学習支援センター」である。教材を含むプログラム開発は筆者が行ったが、プログラムの運営については共通教育機構事務課の職員が中心となり、トラブルシューティングや問い合わせへの対応などを担った。また、学習支援センターに所属する教員と学生スタッフは、三つの課

題の採点およびフィードバック業務を担った。フィードバックは、課題を提出した受講者一人ひとりを行うため、膨大な量であったが、学習支援センター教員が、学生スタッフをトレーニングする他、ルーブリックを活用するなど、業務の効率化を図った。

また、成績評価には反映されないが、参加任意の対面プログラムを8回実施している。対面プログラムは2時間のプログラムで、「批判的思考ワークショップ」、「学生企画キャンパスツアー」、「何でも相談コーナー」の3部で構成されている。希望者は1回のみ参加が可能となっている。ここで主体的な役割を担ったのは、学習支援センターの学生スタッフである。批判的思考ワークショップでのグループディスカッションにおいてファシリテーターとして活躍し、また、学生目線によるキャンパスツアーを企画し、何でも相談コーナーでは、学生の経験に基づいた適切なアドバイスを送っていた。このように教員と職員と学生が協働する体制を構築できたことは、プログラム運営において非常に効果的であった。また、今後も継続して入学前教育プログラムを実施する場合、「教職学協働」の体制を整備し強化することは必須であると考ええる。

#### 4. 入学前教育プログラムの検証

##### (1) プログラムの単位認定結果

当該プログラムの受講対象者は全6学部新入生の1,751名である。そのうち単位認定プログラムとして受講したのは、5学部の1,578名である。1,578名のうち1,194名(75.7%)の学生が、成績評価において60点以上のスコアを獲得し、2単位が付与された結果となった。最も単位認定率が高かった学部では、359名中296名(82.5%)が単位認定された。また、任意の対面プログラムに参加した学生は127名であったが、このうち117名(92.1%)が合格し、単位が認定されている。一方で、カリキュラムの都合上、単位認定プログラムとして実施できなかった学部については、受講者173名中、合格基準の60点を超えた学生は、わずか30名(17.3%)であった。

##### (2) 1年次春学期の成績(GPA)との相関

当該プログラムの検証を行うために、単位認定の対象であった5学部の学生( $n=1,578$ )の1年次春学期のGPAとプログラムの素点の相関を調べたところ、中程度の相関( $r=0.44$ )が認められた。図2は、素点を10点刻みにした集団ごとのGAPの平均を示したものである。素点80点以上の集団については、不合格の60点以下の集団よりも高いGPAであった。なお、合格者全体( $n=1,194$ )の平均GPAは2.32で、不合格者全体( $n=384$ )の平均GPAは1.47であった。

続けて図3では受講者のプログラム終了時期と1年次春学期のGPAとの関連性を示す。終了時期は、最終テストの受験日を目安とし、LMS上にある各受講者の学習記録から確認した。ここでは、終了時期が早期であればあるほどGPAが高いことが確認できた。特に4月の入学前までに終了した学生については2.74と非常に高いGPAであった。これは合格者全体のGPA 2.32と比較しても著しく高く、特筆すべき点である。

##### (3) プログラム終了後のアンケート結果と考察

プログラム終了時に実施したアンケートでは、「教材のわかりやすさ」、「プログラムを通して大学で学ぶイメージがついたか」などについて6件法(「とてもそう思う」~「まったくそう思わない」)で尋ねた。回答者( $n=1,181$ )からは、当該プログラムについて概ね肯定

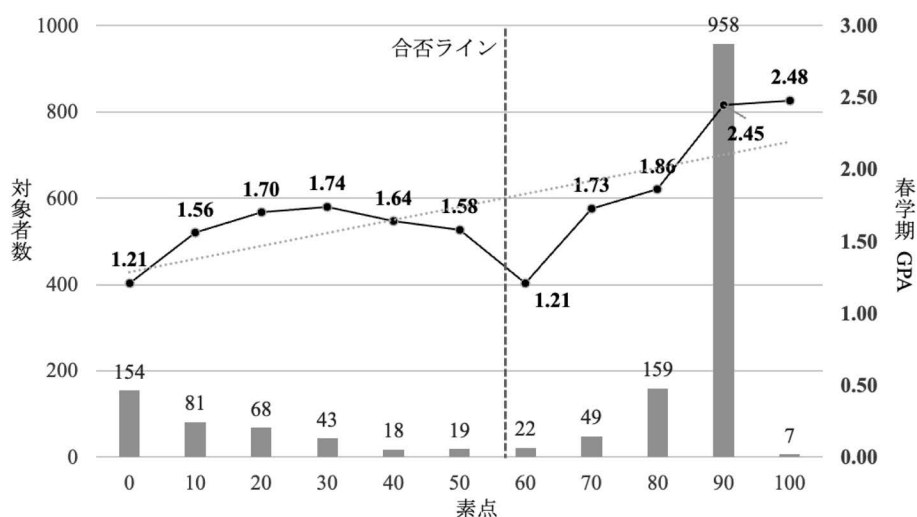


図2 プログラム受講者の素点と1年次春学期の GPA

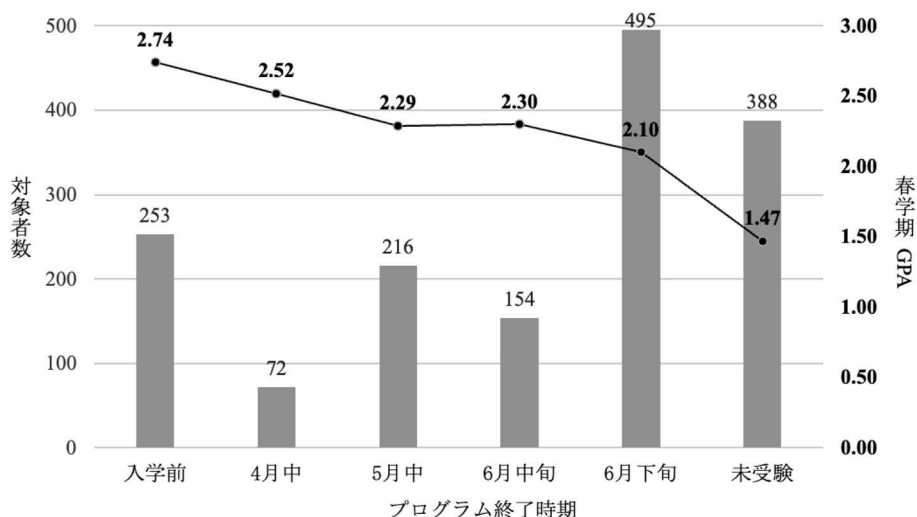


図3 受講者のプログラム終了時期と1年次春学期の GPA

的な回答を得ることができた。回答の「ややそう思う」も肯定的意見と捉えた場合、「教材のわかりやすさ」については、93.8%、「プログラムを通して大学で学ぶイメージがついたか」については95.1%が肯定的な回答であった。

受講者からの肯定的な評価は喜ばしい結果である。また、前項で示した通り、当該プログラムの合格者がより良い成績を取る傾向にあること、早期にプログラムを終了した学生がより良い成績をとる傾向にあることは有意義な結果であった。次年度の実施に向けては、合格者の割合を増加させること、また、早期のプログラム終了を促すための仕組みづくりに取り組むことで、入学前教育プログラムの更なる改善を図ることができる。一方で、プログラム合格者と早期終了者と1年次春学期の成績の相関は認められたものの、これがプログラムの成果であると断言することはできない。学習に対する姿勢や、計画的に学習する力は、学生自身が当初より身につけていたもので、当該プログラムに依らずとも主体的に学業に励むことができたとも推察できる。どのような学生が学習に対する積極的な姿勢を有し、主体的に学ぶことができるかは、当該プログラムで得られた様々なデータや、その他の成功要因等を分析しなければならない。この点については、今後の課題としたい。

## 5. ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育

ウィズコロナの経験は、大学にとっても学生にとっても困難が伴うものであったが、通信環境の整備、LMS の導入、ICT 活用的一般化など、教育環境の充実化を促進させた。コロナ禍以前の本学では、入学前教育は対象が限定されており、また、コスト面でも、短期的な面でも、立地的な面でも、新入生全員を対象とすることは不可能であった。しかし、LMS を含む「テクノロジー」を活用することで、この問題は解決でき、入学予定者全員を対象に教育プログラムを提供することができるようになった。しかし、オンデマンドといったオンラインプログラムは、受講者にとっては大きなチャレンジにもなる。モチベーションを維持し、自己管理しながら学習を進めていくことは難しい。そこで必要になるのが、「人との繋がり」である。本学では、1 年次生全員が履修する初年次ゼミがあるが、ある特定クラスでは、全員の素点が高得点となっており、全員が単位認定の対象となった。そのクラスを担当する教員にヒアリングを行ったところ、教員と学生が頻繁にコミュニケーションを取っていること、また、学生同士が LINE グループを設定し、情報を常に共有していることが分かった。また、本稿で紹介した任意の対面プログラムに参加した新入生も同様である。運営スタッフの先輩学生や新入生同士で LINE を交換したりと、入学前から情報共有したりしていたことが確認できた。これは、「人との繋がり」が、学習への積極的な姿勢や大学生活全般に良い影響をもたらすことを示唆しているのではないだろうか。

ポストコロナの初年次教育は、「テクノロジー」と「人の繋がり」のベストミックスを図ることで、深化させていくことができると考える。テクノロジーの活用により、様々な制限を無くすことができ、初年次教育を早期化することができる。また、「人の繋がり」の仕組みを構築することで、学生の学習意欲を高め、動機を維持することができる。本学の入学前教育の取組みが、「テクノロジー」と「人の繋がり」のベストミックスのモデルとして初年次教育全体に寄与できるよう、今後もプログラムの充実化を図っていきたい。

### 参考文献

- 中央教育審議会(2014)『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)』[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm) (参照日 2023 年 12 月 17日)
- 自己調整学習研究会(編)(2012)「自己調整学習を育てる大学教育」『自己調整学習—理論と実践の新たな展開へ—』北大路書房, pp. 241-265.
- Knowles, Malcolm S. 渡邊洋子(監訳)・京都大学 SDL 研究会(訳)(2005)『自己主導型学習ガイドともに創る学習のすすめ』明石書店 (Knowles, Malcolm S. (1983) *Self-Directed Learning: A Guide for Learners and Teachers*. New York, NY: Associate Press.)
- 進研アド(2018)「高大接続改革時期の入学前教育、その課題と可能性—進研アドセミナー報告—」『Between 情報サイト・大学の課題解決をサポート』<https://between.shinken-ad.co.jp/hu/2018/06/nyugakumae.html> (参照日 2023 年 12 月 17日)
- 杉谷祐美子(2015)「高大接続に向けた大学教育の対応—移行期の教育活動の効果と課題—」『ベネッセ教育総合研究所』<https://berd.benesse.jp/feature/focus/10-koudai2/activity3/> (参照日 2023 年 12 月 17日)
- 鈴木克明(監修)・市川 尚・根本淳子(編著)(2016)『インストラクショナルデザインの道具箱 101』北大路書房
- 及川 愛・石田あすみこ(2019)「入学前教育の力点はシフトしている—入学前教育を充実させる観点の整理—」『大学時報』, 384, 66-73.